



三島由紀夫短篇全集 1

花ざかりの森

三島由紀夫短篇全集 1

花ざかりの森

昭和46年1月20日 第1刷発行

著 者 三島由紀夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21／郵便番号112

電話東京(945)1111(大代表)

振替東京3930

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定 価 650 円

© Yōko Hiraoka 1971, Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

0393-135311-2253 (0) (文1)

目次

花ざかりの森

7

彩絵硝子

38

苧菟と瑪耶

61

みのもの月

80

祈りの日記

98

岬にての物語

136

煙草

159

中世

171

軽王子と衣通姫

202

あとがき

239

装
幀
橫
山
明

花ざかりの森

三島由紀夫短篇全集**1**

花ざかりの森

かの女は森の花ざかりに死んで行った
かの女は余所にもっと青い森のある事を知っていた

シャルル・クロス散人

序の巻

この土地へきてからというものの、わたしの気持には
隠遁ともなづけたいような、そんな、ふしぎに老いづ
いた心がほのみえてきた。もともとこの土地はわたし
自身とも、またわたしの血すじのうえにも、なんのゆ
かりもない土地にすぎないのに、いつかはわたし自

身、そうしてわたし以後の血すじに、なにか深い連関
をもたぬものでもあるまい。そうした気持をいだいた
まま、家の裏手の、せまい苔むした石段をあがり、物
見のほかにはこれといって使い途のない五坪ほどの草
がいちめんに生いしげっている高台に立つと、わたし
はいつも静かなうつけた心地といっしょに、来し方へ
のもえるような郷愁をおぼえた。この真下の町をふと
ころに抱いている山脈にむかって、おしせまっている
湾が、ここからは一目にみえた。朝と夕刻に、町の
はずれにあたっている船着場から、ある大都会とを連
絡する汽船がでてゆくのだが、その汽笛の音は、ここ
からも苛だたしいくらいはつきりきこえた。夜など、
灯をいっぱいつけた指貫ほどな船が、けんめいに沖を
めぐっていた。それなのにそんな線香ほどに小さな灯
のずれようは、みていて遅さにもどかしくならずには
いられなかった。

いくたびもわたしは、追憶などはつまらぬものだど
おもいかえていた。それはほんの一、二年まえまで
のことである。わたしはある偏見からこんなふうに考

えていた。追憶はありし日の生活のぬけがらにすぎぬではないか、よしそれが未来への果実のやくめをする場合があつたにせよ、それはもう現在をうしなつたおとろえた人のためのものではないか、なぞと。熱病のような若さは、ああした考へに、むやみと肯定をみいだしたりしがちのものである。けれどもしばらくたつうちに、わたしはそれとは別なかんがえのほうへ榮に移つていった。追憶は「現在」のもつとも清純な証なのだ。愛だとかそれから献身だとか、そんな現実にくためにはあまりに清純すぎるような感情は、追憶なしにそれを占つたり、それに正しい意味を索めたりすることはできはしないのだ。それは落葉をかきわけてさがした泉が、はじめて青空をうつすようなものである。泉のうえにおちちらばつていたところで、落葉たちは決して空を映すことはできないのだから。

わたしたちには実におおぜいの祖先がいる。かれらはちょうど美しい憧憬のようにわたしたちのなかに住まうこともあれば、齒がゆく、きびしい距離のむこう

に立っていることもすくなくない。

祖先はしばしば、ふしぎな方法でわれわれと邂逅する。ひとはそれを疑うかもしれない。だがそれは真実なのだ。

木洩れ日のうつくしい日なぞ、われわれは杖を曳いて、公園の柵に近よつたりするであらう。門をはいると、それがごく閑散な時間かなにかで、人かげのみえぬひろい場所が、たぐいえない懐しいものに思われたりするであらう。ふだんは杖なんぞ持つことのないくせに、なんの気なしに携えてきたそれは、遠い昔、やつとのことで、一秒か二秒のあいだ触らせてもらった家宝の兜の感触なんかを、ふつとおもいださせてくれたりするだらう。そんなときだ。

遠くの池のほとりのベンチで、（それは池の反射や木洩れ日のために、たぶんまばゆく光っているのだが）だれかが行儀よく身じろぎもせずじに憩んでいる。ふとその人がこちらをむく。するとなぜか非常に快活な様子で立ち上つて、ほとんど走り出さんばかりに、木洩れ日をぬつてこちらへ近づいてくる。われわれは

子供っぽいまでの熱心さで、あたかも予期していた絵のようにその人をみつめているにも不拘（かまわらず）、ある距離までくると魚が水の青みに溶け入ってうのように、急激にその親しい人は木洩れ日に融けてしまう。——しかしおそらく、このわたしの告白から、ひとは紋付と袴をつけた大まかな老人を想像するかもしれない。いや、する方が本当かもしれない。が、そうした場合は、却ってすこぶる稀なことだと申してよい。なぜなら「その人」は、度々、背広をきた青年であつたり、若い女であつたりするからだ。と云つて思い過ぎてはいけない。かれらはみな申し合わせたように、地味な、目立たない、整った様子をしている。たいへん遠くからわれわれに微笑をつたえてくる、まるでわれわれのなかにそうした微笑だけをひきつけてみせる磁石でもあるかのように。その微笑は、だが切ない、憧れにも近いようなひたむきさを見せている。……

祖先がほんとうにわたしたちのなかに住んだのは、一体どれだけの昔であつたろう。今日、祖先たちはわたしどもの心臓があまりにさまざまのもので囲まれて

いるので、そのなかに住いを求めることができない。かれらはかなしそうに、そわそわと時計のようにそのまわりをまわっている。こんなにも厳しいものと美しいものとが離ればなれになってしまった時代を、かれらは夢みることさえできなかった。いま、かれらは、天と地がはじめて別れあつた日のようなこの別離を、心から哀しがっている。厳しいものはもう粗糲（そと）な雑ばくな岩石の性質をそなえているにすぎない。それからまた、美は秀麗な奔馬である。かつて霧ふりそそぐ朝のそらにむかつて、ただだけしく嘶（い）くままに、それはじつと制せられ抑えられていた。そんな時だけ、馬は無垢でたぐいなくやさしかった。しかし今、厳しさは手綱をはなした。馬はなんどもつまずき、そうして何度もち上りながらまっすぐに走っていった。もう無垢ではない。ぬかるみが肌をきたなく染め上げてしまつていた。ほんとうに稀なことではあるが、今もお、人はけがれない白馬の幻をみることはないではない。祖先はそんな人を索めている。徐々に、祖先はその人のなかに住まうようになるだろう。ここにいみじ

くも高貴な、共同生活がいとぐちを有つのである。

それ以来祖先は、その人のなかの真実と壁を接して住むようになる。このめまぐるしい世界にあっては、ただ弁証的手段でしかなかった真実が、それ本来の衣裳を身につけるだろう。いままで、怠惰であり引っこみ思案であったそれが、うつくしい果敢さをとりもどすだろう。祖先はじつと、そのあらたな真実によって、はぐくまれることを待つだろう。まことに祖先は、世にもやさしい糧で、やしなわれることを希っている。その姿ははたらきかけるものの姿ではない。かれらは恒に受動の姿勢をくずすことがないもののきわまりの、——たとえば夕映えが、夜の侵入を予感するかのよう、おそれと緊張のさなかに、ひととききわやかに耀く刹那——、あるがままのかたちに自分を留め、一秒でもながく「完全」をたもち、いささかの瑕瑾も受けまいとする、——消極がきわまった水に似た緊張のうつくしい一瞬であり久遠の時間である。

その 一

うまれた家では、夜おそく汽車の汽笛がひびいてきた。天井板のこみいった木目におびえて、ねつかれない子どもの耳に、それが騒音というにはあまりにかばそい、何かやさしい未知の華やかさのようにきこえてきた。ちょうどそれは、おもいがけないとおくでさぎめいている都の夜のようなものである。秋霧が一团の白いけもののように背戸をとおひぬけてゆくのがきこえてきた。それは音のない花火のようにほうぼうではじけてひろがって行った。そのうすい霧のむこうで、桔梗は麻蒲団の模様のうにさびしく白ぼんでいた。……

子どもはひとり寝の夢の隙間に、けんめいにはいりこもうとした。そこでは現実の音がゆめの姿をしているのであった。すると汽笛は、——花野のひとひを笛のような音を立ててのがれてゆく秋嵐のように思われた。雪のふりはじめた北国の小駅を、——たくさんの青い林檎の箱やもっととおい海からはこんできた鮭なぞを載せて、その小駅を出、(客席のあいだにコンロをおき、襟巻をした娘や耳覆つきのラッコ帽子をかぶっ

た老爺などをのせて）——早咲きの山茶花さざんかの村や、煙りまねな、さびれた工場町やを哀しみにも目をむけず、自分勝手にはしてゆく冷淡な汽車のありさまを、すぐさま心にうかべた。それに重って、黒い焼木やいばの埒うちのむこう……霧のなかで、線路の一部がうす白く光っている上を、巨きな機関車がなんども喘息の発作をつづけながら発車するところが見えるのであった。その霧は、線香のような匂いがした。……

父は町へつれて行ってくれるごとに子供ののぞみどおりにしばらく線路のそばの柵に立ってくれた。線路のむこうでは赤い夕日の残りのようなあまたのネオンが、黒い背景のなかでわがままな星のようにまわっていた。

象がとおるたびに歓呼する南国の人のように、不愛がひ想に電車がゆきちがうたびに、子どもは父の腕のなかで跳ねてわらいながらめちやくちに手を叩いた。……

そのころ子どもはよく電車のゆめをみた。ひろい甃たたきとおおきな鉄門と煉瓦塀との、家構は大きかったが、

門前には黒っぽい細道がかよっていた。ゆめのなかではその路を電車がとおるのだ。どこともしれない前の世の都のようなあかるい大通り……（バケツでぶちまけたような光があふれている）……から、お客も運転手もないその電車は闇の小路へまっしぐらにすすんできたのだ。子どもはあきらかに、病人の歯ぎしりのようなレエルのきしりをきいた。闇はテントのようにふくれ、窓にむなしい灯をあかあかとつけた電車のまわりには、ぐるぐるまわすと色のついた火花の出る、あのブレッキ製のおもちゃの火花のような、赤やみどりの星がゆれていた。おもちゃの汽車そっくりのその古い市内電車は、（電車がとおる由もない細路の）門のまえを、すてきな響きをあげて走りすぎてしまった。

……子どもは耳をすました。もうきこえない。夜汽車の、またとおい汽笛がする。だがいましがたすばらしい勢いでかけていった市内電車は、家の左の坂を若い流星のようかけおりて、その反動で今ごろは、夜は灯あかりしたきいろいろ油障子を閉ふしている火の見小屋の角を、まっしぐらに曲ってしまったのであらう。子供は

いつか目をさましている。柱時計の秒針が吃^{くど}ったさきさなみのような音を立てている。しばらくの間へやのなかの置物が、みしらぬ高貴なもののようにみえている。時計がなる。その音への注意が、また子どもを夢のなかへとり戻してしまふ。……

この丈たかい鉄門のまえに立つとき、そのなかに営まれている生活を想像することに、だれしもはげしい反撥をかんじずにはまい。唐草紋様の鉄門はきっちりくぎられた前庭と鬼瓦のような玄関だけをのぞかせていた。その玄関の一棟が門に立つ人にむかって、威丈高な、ほとんど宿命的なあらがいをいどんでいた。煉瓦塀はやしきの内部のすべてを人の目からさえぎり、花の匂いだの、こわだかな笑いごえなどまで、その湿っぽさのなかに吸収した。

父は母屋にはふだんはいなかった。ひろい三棟の温室のわきへ、いおりのようなものをたててそこにいた。母屋とそのいおりとの間には、海原のようにお花ばただけだの菜園だの、葡萄や梨をうえた果樹園だのが

ひろがっていた。夏になると葡萄園のうえには蜂が雲のようにむらがっていた。ちかよっても或る蜂はじつと葡萄のひろい葉にやすんでいた。わたしは庭のあちらにまばゆい夏の雲がたちあがり、そのために蜂の羽や毛がするどい黄金の針のように光るのを、それからやはり金いろをした巨きな目のなかに、かわいらしい夏雲が瀰^みってゆくのをみた。……

母屋には祖母と母がすまっていた。わたしは幼な心にも父と母との別居をいぶかったが、夜、祖母が痛みつかれてねいり、わたしもすっかり寝息をたてているとき、(ほんとうはちらちらと目をひらいては母の動静をさぐっているのだが)母が庭下駄をはいて、あかるい果樹園の月夜を、ずっとこちらまで長い影をひきずりながら、父のいおりへといそぐのを見た。そんなとき——これはわるい神経だろうか——わたしはむしろよろこばしいような愉しいような気持で、きづかない母のうしろ姿を眺めやったのみならず、しいておとなしくしていようという殊勝な気持のほかには何も抱かなかった。祖母は神経痛をやみ、癲癇^{てんかん}をしじゅうお

こした。ものに憑かれたように、そのさけがたい痙攣がはじまるのである。かの女のしずんだうめきがきこえたすと、病室の小さな調度、煙草盆や薬だんすや香炉や、そうしたもののうえを、見えない波動のようにその痙攣が漲ってゆく。するとほんの一瞬間、へや全体が麻痺したような緊張にとぎされ、それが山霧のようにすばやく退くと、こんどは、へや中が、香炉や小管や薬罎などが、一様に、あの沈痛な一本調子な呻吟にみたされた。こうした部屋それ自身というものの、うめきやうなりは、おそらく余人には見当のつかぬことであるにちがいない。しかし痙攣が、まる一日、ばあいによつては幾夜さもつづくと、もっと顕著なきぎしがあらわれてきた。それは「病氣」がわがものがおに家じゅうにはびこることである。

「薬を注いでおくれでないか、坊や」寢覚めのこえで祖母がそういった。それは老いたのだからだけ出る、柔和な、たとえばかすれ勝ちの墨の筆跡のような、郷愁的なまでの発音である。だが、無理な姿勢をしようとしかけたので、またそのあとにうめきがつづいた。

祖母は脚のついたワイン・グラスでいつも水菓をのんだ。わたしはきちんと膝をそろえて、この大役にほんのすこしばかり緊張しながら、水菓の罎をあけた。いまだにわたしは、コルクの栓が、その役目から放たれた——束縛から解放された瞬間の、へんに間が抜けた乾いた、おもえばどことはなしになにかの兆が感じられる底の、ふしぎな音を立てたのをおぼえている。栓を抜くと、わたしは濃い葡萄酒色の薬液がはいっている罎をかたむけて、そーっとグラスのほうへよせて行った。グラスがきわめてすこしの分量しかうけいれぬことを知っている経験から、そういう徐ろな動作は、なにげなくほとんど無意識にされるべきはずなのにこの時わたしはみようなきこちなさを感じたのを今もおぼえている。——まだ液がながれてこない、まるで全く同色の障害物でもあるように。わたしは日に透かしてしずかに罎をゆすった。なんにもはいっていない。もう一度かたむけた。やつぱり流れてこない。ふとわたしは気がついた。ある一定のあやうい角度までくると、わたしの手頸の骨が器械のように固定してしまう

のだ、ちょうどそれ以上ひらかない戸の蝶番もようがひがかつきりくいちがうように。わたしはそれを一つの迷信のようにおもう。ばかばかしくかんじる。けれど、それは正反對にふいに抑えきれぬほどきどきしはじめた。こんどは手のふるえるのがあぶなくて容易に鱈をかたむけることができなくなってしまった。そのとき、わたしはありありと鱈のなかに一匹の「病氣」をみたのである。彼は、ごく倭ちひさく、そろえた膝にあげてのせてねむっていた、自分のからだを洗っている薬の海にはからきし氣づかぬかのように。

母屋の果てのふるい部屋々々へ、わたしは兜やよろいや黒い毛ずねのような太刀なぞをみにいった。その帰り、婢ひはくりやへゆくほうの廊下でわたしと別れて、もうここからさきはおこわくはいらっしゃいますまい、と言いながらむこうへ行つて了う。ほんとうはこれからがわたしにいちばんこわいのだ。しかしそれをいうのがわたしははずかしくて、哀訴あいそともなんともつかぬようなおもいをこめた目つきを投げるのがつねだった。それなのに婢はふりむいてくれない。三、四

間まさきの祖母のへやまでのあいだ。わたり廊下がひとつ。曲りかどが三つ。——こわさにふるえながら、昼間のよく光った風がとおりすぎる暗い廊下を、ちょうどその風とおんなじにわたしが走ってゆく。と、角々かくかくで（ひとりはず）「病氣」に出会った。それもあたふたといそいでいる。わたしよりずっと長身だ。顔のないのもあれば、顔のあるものもあった。顔のあるもののひとり、——それはつみもなくわらっていた。彼はまだ「死」と近しくない「病氣」にちがいない。彼はきつともっと「死」に近い「病氣」のところへ、なにかたよりをもたらしにゆくにちがいない。ある日わたしの右の小指がほんのすこしばかりそのぬらりとした見えぬものにさわって了った。わたしはその日、ひまさえあればその小指をあらっていた。あんまりあらっていると指のさきがいたいたしくふやけて、ついにぞ注意したことのない指紋が、へんに清潔に、はっきりとみえてきた。その指紋が、わたしにねむられぬ部屋むすめの天井の木目だの、それから「病氣」が常用する、象形文字だのをおもわせた。